**保津川観光**

保津川の曲がりくねった急流を船で下っていくためには、船の３種類の仕事、櫂ひき 、舵もち、竿さしの特別な操船技術が必要とされる。櫂ひき、または漕ぎ手は船の前方に座り、竿さしは竹の長い竿（さお）を持って船首に立ち、岩を押して船を守り、そして舵もちは船の後ろで舵（かじ）を操り正しい航路とる役割がある。

保津川での物資の輸送が減るにつれて、船頭たちの仕事は物資の輸送から人の輸送に変わることとなった。保津川は王族、特にイギリス王室のファミリーの訪問先として人気があった。1881年にはイギリス王室のアルバート・ヴィクター王子，ジョージ王子（後のジョージ5世国王）が保津川下りを楽しまれ，１９２2年にジョージ国王の息子エドワード王子をはじめ王室の方々が川下りをされた。英国王室では、「１は富士山、２は保津川下り」と言われていた。1901年、1902年には有名なイギリス人の写真家ハーバート・ポンティング（1870ー1935）が乗船者を運ぶ保津川の船頭達の写真を残している。王子たちの乗船と共にこの写真は保津川に世界的な注目を集めた。

保津川下りは１年中楽しむことが出来る。春は桜が渓谷を彩り、秋はたくさんの紅葉が山際を飾る。夏は急流のしぶきが暑さを忘れさせ、水が凍りつく冬は覆いとストーブのおかげで快適に川下りを楽しむことができる。